

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：12102
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22531055
 研究課題名（和文） 障害学生支援における援助意欲向上方略としての障害開示条件に関する包括的研究
 研究課題名（英文） A comprehensive study on disability-disclosure as a means to provide incentive to help peers with disabilities to students without disabilities in support settings
 研究代表者
 河内 清彦(KAWAUCHI KIYOHICO)
 筑波大学・教授
 研究者番号：
 50251004

研究成果の概要（和文）：本研究では、弱視学生への健常学生の支援自己効力感が移動、読み、書きの3次元からなり、個人的特徴と異なる関係にあることを示した。上記の支援自己効力感及び既存の交流自己効力感に及ぼす弱視男子学生の障害開示の効果は、男女で異なり、男子学生では場面が、女子学生では手段が影響していた。女子学生の意識に及ぼす開示手段の影響では、映像による場合は認知→イメージ→自己効力感の仮説も出るが成立したが、活字による場合は成り立たなかった。

研究成果の概要（英文）：It is indicated that the domain of Support of Students without Disabilities for Peers with Partial Sight comprises three dimensions--‘mobility’, ‘reading’ and ‘writing’--and that each dimension has different relationship with personal characteristics from each other.

The influences of disability-disclosure by a male student with partial sight on willingness to support and self-efficacy expectations of being a friend are found to be different based on the gender of the other party.

The influences are dependent on settings with male students, and means with female students.

It is suggested that, with female students, the hypothetical model is supported in disability-disclosure by means of image, but not by means of text.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード: 自己効力感, 援助要請課題, 障害開示, 弱視学生, 健常大学生, 開示手段, 開示場面, 支援意識構造

1. 研究開始当初の背景

(1) 障害学生支援を促進することの必要性 今日多くの障害学生が大学に進学しており, 彼らを受け入れている高等教育機関では障害学生が健常学生と等しく学ぶ権利を保障するための支援の取り組みが行われている。しかし, 彼らのキャンパスライフが充実したものになるには, 大学側の配慮と同時に障害学生の周囲にいる健常学生の支援が不可欠である。それにも関わらず, 実際に支援を行っている学生の数は極めて少ないことが報告されている。

そこで, 健常学生の援助意欲を障害学生自身が引き出すのに有効と考えられる「障害開示 (Disability Disclosure)」に焦点を当てその効果を「開示内容」「開示手段」「援助場面」「自己効力感」などの視点から解明し, 両学生間の良好な対人関係を構築するための方略プログラム開発が必要である。

(2) 障害学生支援を促進するための方略としての障害開示の可能性

研究代表者は, まず健常学生の行動を誘発するのに有効とされる自己効力感 (Self-Efficacy Expectation) に着目し, わが国で初めて当該分野の自己効力感尺度を開発した (河内, 1999, 2003)。さらに, 研究代表者は, 開発した尺度の回答特性を明らかにした上で (河内, 2004), 当該自己効力感の決定因の一つとされている障害者との自主的な接触経験に関する研究を行ったが (河内, 2006), これらの接触経験の効果には見るべきものもあったが, 自主的な接触でも効果のないものもあり, 場合によっては否定的な結果も得られた。このことから, 支援者である健常者の自己効力感を高めるためには, 支援を受ける障害者の役割にも焦点を当てる必要があると考えた。

そこで, 対人行動の変容に大きな役割を果たすとされている「自己開示 (Self-Disclosure)」に着目し, その中の障害に関する「障害開示 (Disability Disclosure)」に焦点を当てた。障害開示については, 開示条件の違いや交流自己効力感との関連に関しその有効性の一端を示すことができた (相羽・河内, 2010)。しかし, この方略はわが国の障害者支援の分野では実質的にはまだほとんど手が付けられていない分野であり, 障害開示の効果を規定する要因についてのより詳細な検討が必要である。

2. 研究の目的

(1) 研究 I では, 援助意欲が低いとされる健常学生において, 援助要請課題の違いが援助意欲に影響するかを解明することを目的とした。このため, 弱視学生が必要とする援助要請課題に対する健常学生の認知予期 (支援自己効力感) の

次元性を検討し, 得られた次元での援助要請課題と健常学生の個人的特徴との関係を考察する。

(2) 研究 II では, 開示効果が異なるとされる開示手段による障害開示が, 健常学生の交流及び支援自己効力感に及ぼす効果を解明することを目的とした。このため, 同一内容の障害開示を, 異なる開示手段 (映像, 活字) によって提示して, 障害開示の効果の違いがどこにあるかを, 異なる援助場面 (例えば, 学内と学外) を比較して考察する。

(3) 障害学生に対する健常学生の援助意欲と関連する自己効力感を高めるためには, 障害開示者の対人魅力は重要な規定因であり (冨田・相羽・河内, 2010), 魅力を高める上では開示内容への望ましい認知が必要である。そこで, 研究 III では, 障害開示内容への認知→弱視開示者に対するイメージ→健常学生の交流・支援自己効力感の潜在変数の流れを示す仮説モデルを立て, 共分散構造分析に基づいて, 異なる開示手段別に, 障害開示が健常学生の支援意識過程に及ぼす効果のメカニズムを考察する。

3. 研究の方法

(1) 研究 I

① 調査参加者と実施手続き: 首都圏内にある大学で調査協力の同意が得られた 280 名の健常学生 (男子 110 名, 女子 170 名) に対し, 集合調査を実施した。参加者の平均年齢は 20.32 歳 (SD=1.36) であった。

② 援助要請質問紙: まず, 学生生活で弱視学生を含む視覚障害学生が最も必要とする移動と読み書きの援助要請課題を設定しこれら 2 つの課題について, 弱視者である研究協力者が, 大学院修了の弱視者 3 名に半構造化面接を実施して 83 項目を収集した。それに加えて, 文献・資料に基づいて 115 項目が作成された。これら 198 項目のうち各場面で当事者と文献資料の両方に含まれている項目と 2 名以上の弱視者が挙げた項目の基準に当てはまる, 移動 13 項目と, 読み書き 12 項目を採用した。なお, 各質問項目に対する評価尺度は, このような場面で弱視学生に対して援助が「できない」の 1 から「できる」の 5 までの 5 件法とした。

③ 個人要因: 健常学生の性別, 視覚障害者との接触経験 (あり 90 名・なし 190 名), 将来の希望職種 (一般職 180 名・支援職 100 名) を採用した。なお, 一般職には一般企業, 事務職員等, 支援職には福祉・医療専門職, 教員を含めた。

(2) 研究 II

① 参加者: 首都圏内にある複数の大学において授業時間の一部を用いて調査を実施し, 調査

協力の同意が得られた 591 名の健常学生(男子 187 名, 女子 404 名)を分析対象とした。参加者の平均年齢は 20.2 歳, 標準偏差は 1.6 であった。

②測定用具: 交流自己効力感尺度は, 相手と何かを一緒にするような交流場面に対し遂行できるか否かという自己効力感を測定する交友関係尺度(河内, 2003)を採用した。また, 支援自己効力感尺度は, 相羽・河内(2011)が, 研究 1 で作成した「移動支援尺度」, 「読み支援尺度」, 「代筆支援尺度」を用いた。本尺度で示す刺激対象については, 河内(2003, 2004, 2006)を参考に, 「視覚障害のために, 外出するときに遠くの看板が見えなかったり, 読み書きするときに虫眼鏡などの拡大レンズを使ったりする学生」とし, 各項目に対する回答形式については, 「全く気軽にはできない」(1 点)から「非常に気軽にできる」(7 点)までの 7 件法とした。

③ 障害開示内容: 障害開示の提示場面については, 自己開示研究で検討されている公的・私的場面を参考に, まず, 講義教室場面(公的)とカラオケショップ(私的)の 2 場面を設定し, 各場面においては工夫次第で一緒に行動ができるという障害開示シナリオを, 大学院生 2 名と視覚障害心理学担当の教授 1 名で作成した(Table 1)。このシナリオを用いた障害開示を, 参加者と初対面で同学年の男子弱視学生が, ビデオ映像(以下, 映像), あるいは, 活字文章(以下, 活字)を通して行った。これら 4 開示条件(2 場面×2 手段)での障害開示の一つをランダムに参加者に提示してから, 交流自己効力感尺度と支援自己効力感尺度への回答を求めた。

表 1 弱視学生の見え方に関する説明文

「講義教室(公的)場面で用いた開示文」見た目ではわからないかもしれないけど, 僕は目が不自由なんです。でも, 全く見えないという訳ではないのです。少しは見えています。弱視です。弱視というのはメガネやコンタクトを使っても普通の視力がでないです。僕の視力は 0.1 くらいしかないので, 文字を読むときは, 虫眼鏡やルーペなどで拡大したり, 顔を本にすっごく近づけたりします。また, 拡大コピーしてもらったこともあります。それでも, 眼がすぐ疲れてしまうんです。そうすると文字をうまく読めなくなるんですよ。見える範囲とか, 色の見え方などは特に問題ないんですけどね。

そんな僕なので, できることもあれば, できないこともでてくるんです。特に, 読み書きや移動にはいつも苦労してるんですよ。僕はみんなと勉強するのが好きなので, 色々なゼミに顔をだしてます。ゼミで発表を聞くとときは, パワポの文字を単眼鏡などの拡大レンズを使って見ることができます。でも, 拡大した文字を見える人と同じ速度では読めません。なので, メモをとるのが難しいです。だから, あなたがゼミでパワポを使うときは, 事前にスライドをプリントしたものをくれると助かります。それから, ゼミに参加するときなんですが, 初め

ての場所に行くのは大変なんです。いつも使ってる教室なら問題ないんですが, 初めての教室だと, 教室の標識や案内板が見えなくてさまよってしまうこともよくあるんです。なので, 初めての教室に行くときには, 僕と一緒に連れてくると助かります。色々お願いをしてしまったけれど, あなたに僕の ことを知ってもらいたいと思い, こうやって話しました。これからよろしくお願ひします。

「カラオケショップ(私的)場面で用いた開示文」見た目ではわからないかもしれないけど, 僕は目が不自由なんです。でも, 全く見えないという訳ではないのです。少しは見えています。弱視です。弱視というのはメガネやコンタクトを使っても普通の視力がでないです。僕の視力は 0.1 くらいしかないので, 文字を読むときは, 虫眼鏡やルーペなどで拡大したり, 顔を本にすっごく近づけたりします。また, 拡大コピーしてもらったこともあります。それでも, 眼がすぐ疲れてしまうんです。そうすると文字をうまく読めなくなるんですよ。見える範囲とか, 色の見え方などは特に問題ないんですけどね。そんな僕なので, できることもあれば, できないこともでてくるんです。特に, 読み書きや移動にはいつも苦労してるんですよ。僕はみんなとカラオケに行くのが好きなので, よくカラオケに行くんです。カラオケで歌うときは, TV モニターの歌詞を単眼鏡などの拡大レンズを使って歌うことができます。でも, 拡大した文字を見える人と同じ速度では読めません。なので, テンポの速い曲は歌うのが難しいです。だから, 僕と一緒にカラオケに行くときには, 手元で歌詞表示ができるリモコン モニターのあるお店を捜してくれると助かります。それから, カラオケに行くときなんですが, 初めてののお店に行くのは大変なんです。いつも使っているお店なら問題ないんですが, 初めてののお店だと, 店の看板が見えなくてさまよってしまうこともよくあるんです。なので, 僕と一緒にお店まで行ってくれると助かります。色々お願いをしてしまったけれど, あなたに僕の ことを知ってもらいたいと思い, こうやって話しました。これからよろしくお願ひします。

(3)研究 III

①参加者: 研究 II で調査協力の同意が得られた学生の中の女子学生 404 名を分析対象とした。なお, 映像群は 198 名, 活字群は 206 名であり, 両群の平均年齢は 20.0 歳(SD = 1.5)であった。

②調査手続き: 調査手続きは, 研究 II の内容と同じであり, 参加者には, 4 つの障害開示条件のうち 1 つがランダムに提示された。その上で, 認知評価項目, イメージ尺度, 自己効力感尺度への回答を求めた。

③測定用具: 弱視開示者への認知評価項目としては, 自己開示研究で用いられている望ましさ,

内面性、取り入り、真正性の4項目を採用した。なお、各項目の評定尺度は「全くそう思わない」(1点)から「非常にそう思う」(7点)までの7件法とした。

次に、弱視開示者へのイメージを測定するイメージ尺度としては、栗田・楠見(2010)が使用した尊敬尺度(6項目)及び社会的同情尺度(7項目)を採用した。どちらもSD法の尺度であり、項目の回答形式は中間点を4点とし、対となる形容詞への当てはまりの程度を評価する7件法であった。最後に、自己効力感尺度としては、研究Ⅱと同じく、交友関係尺度、移動支援尺度、読み支援尺度、代筆支援尺度を採用した。

4. 研究成果

(1) 研究Ⅰ

① 援助要請課題の因子構造: 本研究で設定した2つの援助要請課題の独立性を検討するため、全項目因子分析を行った結果、固有値1以上の因子が3つ検出された。3因子によるプロマックス法斜交回転後の因子負荷量が.400以上の項目を各因子の代表項目とした。

項目内容から各因子を解釈すると、第Ⅰ因子は、10項目中9項目が移動の援助要請課題に含まれる項目であり、移動援助因子と命名した。第Ⅱ因子は、8項目中6項目が読み作業を中心とした項目であることから、読み援助因子とした。第Ⅲ因子は、3項目全てが代筆に関わる内容であったので、代筆援助因子と命名した。

なお、各因子の因子間相関は、移動援助因子と読み援助因子が0.576、移動援助因子と代筆援助因子は0.479、読み援助因子と代筆援助因子は0.460であった。

② 援助要請質問紙の尺度構成: 各因子を代表する項目からなる3つの暫定尺度について、暫定尺度ごとに主成分分析とCronbachの α 信頼性係数に基づき、等質性と内的一貫性の検討を行った。その結果、全ての値が統計的に満足できるものであったため、移動援助尺度・読み援助尺度・代筆援助尺度の3下位尺度を構成した。

③ 各援助内容における健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の検討: 上記の3尺度と個人要因との関係を検討するため、各尺度項目の総和を尺度得点とし、その平均値とSDを個人要因別に求め、それぞれについて、性別、接触経験、希望職種の $2 \times 2 \times 2$ からなる多元配置分散分析を行った。

その結果、移動援助得点と代筆援助得点は交互作用が有意ではなく、いずれの場合も、女子の方が男子よりも、また、接触経験のあるの方がそうでない者よりも有意に援助しやすいことが示された。これに対し、希望職種では、移動援助得点で有意な主効果は見出されなかったのに対し、代筆援助得点では支援職を希望する者は一般職を希望する者よりも有意に代筆援助得点が高いことが示された。

他方、読み援助尺度では、性別と接触経験の間に1次交互作用が見られたため、これらについて単純主効果の検討を行った。このうち、性別では、接触経験のない者の中で、女子が男子よりも読み援助得点が有意に高かった。一方、接触経験では男子にのみ、接触経験のある者が、ない者よりも読み援助得点が有意に高かった。このことから、援助を行う健常学生の立場からは、読みと書きの援助要請課題は異なるものであり、特に、書きの代筆援助では希望職種間に違いが見られており、支援者の立場を考慮することの重要性が示唆された。

(2) 研究Ⅱ

異なる開示場面(講義教室・カラオケショップ)で行った障害開示を、異なる開示手段(映像、活字)によって提示した場合、健常学生の交流自己効力感及び支援自己効力感に及ぼす開示効果の違いを検討した。このため、開示手段と開示場面を独立変数に、各尺度得点を従属変数とした2要因の分散分析を、同性開示と異性開示別に行った。開示者が男性であるため男子学生にとっては同性開示、女子学生にとっては異性開示である。

① 同性開示について: 開示手段による影響は交流自己効力感及び支援自己効力感のいずれでも見出せなかった。このことから、男子による同性の障害開示の場合は、対面形式による開示にこだわる必要は無く、時間とコストがかからない活字による障害開示を行うことで目的が達せられる可能性が示唆された。しかし、自己開示に関する多くの先行研究が、映像のような対面開示の方が、活字のような非対面開示よりも開示効果は大きくなるという結果を見出しており、本研究結果との違いが何によるのかを今後詳細に検討することが必要である。

一方、開示場面については、交友関係尺度で、講義教室での障害開示が、カラオケショップよりも、開示効果を有意に高めていた。これは、初期の対人関係で男子学生が自己開示を受け入れやすいのは、公の社会的場面であり、障害開示でも、より社会的な講義教室場面での効果が大きかったと推察される。従って、大学関係者は、障害学生が受講している講義については、予め有効とされる障害開示文章を健常学生に配布することで、女子学生よりも援助意欲の低い男子学生の交流意欲を高めることができるかもしれない。

② 異性開示について: 開示手段の影響をみると、交流自己効力感及び支援自己効力感のいずれの場合でも映像の方が活字よりも開示効果を有意に高めており、先行研究結果と一致していた。これは映像では、文章の音声化だけでなく、障害開示する弱視学生の表情や視覚補助具を使う様子等の視覚的情報が含まれていたため、視聴覚を通してよりリアルに情報を伝えることができたことで、具体的情報に関心を持つ女子学生の共感を得て、自己効力感にも障害開示の効

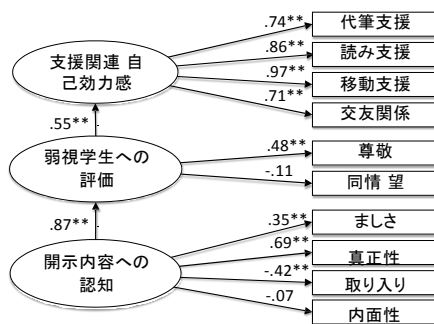
果が現れたと推察される。ただし、交互作用の見られた代筆支援尺度では、カラオケショップ場面に限定された。これは女子学生も授業を受けなければならない講義教室内での代筆作業は勉学には妨げであることから、援助意欲が阻害されたと推察される。

一方、開示場面による開示効果の違いは、同性開示とは異なり、異性開示では見出されなかった。これは、女子の性役割にはサマザマな場面で世話をすることが含まれているため、援助場面には影響されなかったと推察される。なお、交互作用は有意ではなかった。

(3)研究 III

認知(望ましき・内面性・取り入り・真正性)、イメージ(尊敬尺度・社会的同情尺度)、自己効力感(交友関係尺度・移動支援尺度・読み支援尺度・代筆支援尺度)を潜在変数(観測変数)として、各潜在変数間の基本的モデルを検討するため、認知、イメージ、自己効力感に関わる各変数間の相関係数を障害開示手段別に算出した。

①映像による障害開示の仮説モデルの検討:
映像による障害開示の仮説モデル(図 1)についてみると、認知がイメージを媒介して自己効力感に繋がっており、仮説モデルが支持された。このことから、「一緒に行動できる」という障害開示は、健常学生から内容が望ましいと認知されているので、これを視聴覚的手段を用いて行うことで弱視学生へのイメージがより魅力的となり、その結果、健常女子学生から受容され、健常学生の自己効力感が高まったと推察される。ただし、イメージの潜在変数に影響している認知の潜在変数が、開示内容、開示者の外見や身振り、開示者の話し方など何を認知評価しているかは、このモデルからは不明である。

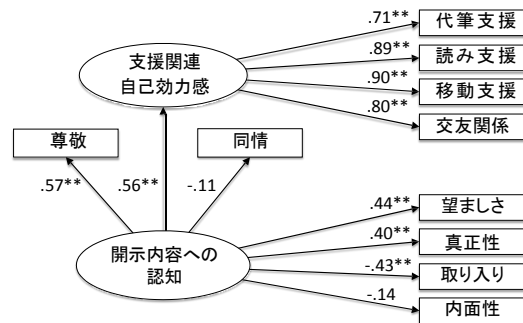


$\chi^2 = 60.1, df = 33, p < .01, GFI = .941, AGFI = .905, RMSEA = .065$
** $p < .01$

図1 対面開示が健常学生の意識過程に及ぼす影響 (N = 198)

②活字による障害開示の仮説モデルの検討:
活字による障害開示の仮説モデル(図 2)についてみると、イメージに不適解がみられ、仮説モデルは支持されなかった。これは、活字による開示内容が文章だけなので、良し悪しの認知評価はできても、弱視開示者に対する統一したイメージが作れなかったことが、何らかの影響を及ぼしていると推察される。特に、不明確な情報では健常

学生が想起するイメージが多様化してしまうことで、認知の潜在変数とイメージの潜在変数との繋がりが稀薄になったと推測される。



$\chi^2 = 47.42, df = 34, 05 < p < .10, GFI = .956, AGFI = .929, RMSEA = .044$
** $p < .01$

図2 非対面開示が健常学生の意識過程に及ぼす影響 (N = 206)

そこで、活字による障害開示のモデルについては、尊敬尺度と社会的同情尺度というイメージの観測変数を用いて分析した。その結果、認知の潜在変数は尊敬尺度の観測変数と自己効力感の潜在変数それぞれに対し、直接効果を及ぼしていたが、尊敬尺度の観測変数と自己効力感の潜在変数との繋がりは認められなかった。このことから、活字による開示内容は、健常学生の自己効力感を高める弱視開示者へのイメージとは必ずしも繋がっていないことが推察される。このことから、開示内容が映像による障害開示において認知の潜在変数とイメージの潜在変数とを結びつける主要な要因ではないことが推測される。むしろ、開示者の外見や身振り、話し方によるものと解釈できる。これらの関係については、より詳細な検討が必要である。

以上、映像による障害開示の場合は、どちらかというと開示者の外見や身振り、話し方など非言語的条件に影響されやすいことから、開示内容よりも、イメージを良くするような開示者自身のパフォーマンスを重視すべきであろう。これに対し、活字による障害開示の場合は、弱視開示者のイメージを高めるような内容ではなく、自己効力感に直接影響することが報告されているような望ましい認知内容を取り入れることが必要であろう。

引用文献

- 相羽大輔・河内清彦 (2010) 弱視学生に対する健常学生の交流抵抗感に及ぼす障害開示の効果について. 特殊教育研究, 48, 263-273.
- 相羽大輔・河内清彦 (2011) 弱視学生の援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の効果について. 障害科学研究, 35, 7-18.
- 河内清彦 (1999). 視覚障害学生を交流対象とした「キャンパス内交流自己効力尺度(CISES)」の作成. 教育心理学研究, 47, 471-479.
- 河内清彦 (2003) 「障害学生との交流自己効力感凡用型尺度」の妥当性の検討—聴覚障害および視覚障害条件の影響について—. 特殊教育研究, 40, 451-461.

河内清彦 (2004) 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面及び個人的要因の影響. 教育心理学研究, 52, 437-447.

河内清彦 (2006) 障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度, 友人関係, 援助行動, ボランティア活動を中心に—. 教育心理学研究, 54, 509-521.

栗田季佳・楠見孝(2010)「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果—接触経験との関連から—. 教育心理学研究, 58, 129-139.

富田朝未・相羽大輔・河内清彦 (2010) 全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果. 障害科学研究. 34, 55-65.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

①相羽大輔・河内清彦 2011 弱視学生の援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の効果について 障害科学研究 (査読有) 35 巻, 1-11.

[学会発表] (計 4 件)

① 相羽大輔・河内清彦・柿澤敏文, 異なる開示手段による弱視学生の障害開示が健常学生の支援意識過程に及ぼす効果, 日本教育心理学会, 2012 年 11 月 25 日, 琉球大学 (沖縄県)

② 相羽大輔・河内清彦・柿澤敏文, 弱視学生による障害開示の効果に及ぼす開示手段及び開示場面の影響, 日本特殊教育学会, 2012年9月29日, つくば国際会議場 (茨城県)

③ 河内清彦, 日本における視覚障害学生自立生活経験, 国際交流懇談会(台湾淡江大学・筑波大学) (招待講演) 平成23年12月13日, 台湾淡江大学, 台湾

④ 相羽大輔・河内清彦, 健常学生の支援意識に及ぼす障害開示の効果に関する研究—開示内容と開示手段の効果を中心に, 中華民國建國百年特殊教育系列活動 発表会, 平成 23 年 12 月 12 日, 台湾師範大学, 台湾

6. 研究組織

(1)研究代表者

河内 清彦(KAWAUCHI KIYOHICO)

筑波大学・教授 研究者番号:

50251004